

フリーハグも良いけれど

LL 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

昨年の3月14日に出したブログ「あなたはお乞食さんとフリーハグできますか？」に、3 AM OPさんからコメントをいただいた。色々考えさせられるところがあって、もう一度この問題を別の角度から語ってみようと思うのである。

3 AM OPさんのサイトを拝見すると、若い日本人女性が FREE HUGS の看板を掲げて歩き回る動画がある。

私は、こういう姿には文句なしに共感を覚える。この女性が誰にでも心を開いて直進する姿は、まだ童心を失っていない者の純粋さと美しさを感じさせるからだ。

だが、それと同時に、或る種の危うさを感じさせることも否めない。まだ人間というものが分かっていない危うさと言ったらよいだろうか。

彼女は何の疑いもなく、誰にでも腕を開いているが、そのフリーハグに応える相手は、はたして本当に心を開いているのだろうか。どんなに荒んだ心の持ち主でも、その瞬間は、いつか和やかな気持ちになるのかも知れない。それがフリーハグの良さであろう。

しかし、人間の心の闇は、無邪気な彼女には想像もつかないような底知れぬものを持っている。彼女は知らないで、自分を殺す者や凌辱する者と抱擁し合っているかも知れないのだ。

3 AM OPさんも、フリーハグを見せる動画について、「正直に言うが個人的には胸を打つ映像だ」と語っている。そして、3 AM OPさんは、実際にどこかの公園へ行って、フリーハグをやっている男性と抱き合ってみたのだ。

「笑顔と共に抱き合った瞬間とそれに至るまでは確かに素晴らしい瞬間だったが、意外とアッサリ、その男性はスッと、静かに身を引き、またボードを掲げた。少し拍子抜けした」と、これが3 AM OPさんの感想だ。

「拍子抜け」という言葉も、相手の動作の細かい描写も、そのときの状況を言い得て妙である。

フリーハグで得られる人間どうしの親密な関係は、精神的な触れ合いと身体的な触れ合いが同時に起こることに特徴があると言えよう。心を開くのと同時に、腕を開いて身体的に相手を受け入れるのがフリーハグの行動である。

その精神と身体の動きには微妙なリズムがあって、リズムが合わないと、たちまち「拍子外れ」の違和感に襲われる。こちらの心は開いているのに、相手の心はすでに閉じている。相手の腕はすでに次の対象となる人間を物色し始めている。

精神も身体も今やすれ違いの状態にあるのだ。3 AM OPさんは、そのフリーハグの相手が、「人

間関係の回復」という理想を実現することなど最初から「思っていないように感じた」とまで言っている。

自由な抱擁を求めているながら、最初から心を開いていないというケースも考えられるであろう。あまりイヤラシイ想像はしたくないのだが、女性との抱擁だけを目的とする男が混じっていないとは限らない。

その点、フリーハグの掲示板を持っていても、女性のほうがむしろ自然に見える。女性はどうしても与える側というイメージが強いからである。私の見るかぎり、日本では女性のほうが圧倒的に多いようだが、そこにこのような性の意識が入っているのだとしたら、フリーハグは必ずしも「自由な」抱擁とは言えないであろう。

「見も知らぬ女性をハグすることは、失礼に当たる気がする」と言う3 AMOPさんは、そういう状況に置かれてもつい遠慮してしまうのだが、逆説的に言えば、そのほうが女性の感情に心を開いているとも言えるのである。腕を開くことはつい躊躇してしまうとしても、相手に対する思いやりという点では、精神的に一步踏み込んでいると言えるからである。

昔読んだ小説だったと思うが、どんな相手でも愛さずにはいられない、純真な、まるで聖女のような娼婦がいて、客の言うこと成すこと何ひとつ疑わず、人間を信じたまま殺されるという話があった。

商売だけが目的だったら、腕は開いても心は開かないのが普通であろう。体は許しても唇は許さない、という娼婦のセリフがよく使われるが、唇は心の触れ合い、すなわち愛を象徴するからである。しかし、この殺された、聖女のような娼婦は、腕と同時に心をも開いたのである。

これと、フリーハグを求める女性とを比較するのは不謹慎と思われるかも知れない。しかし、誰にでも無差別の愛を示すという点では、彼女らは本質的に異なる立場にあると言える。

私は、ここでもう一つ、古代社会に多く見られた「聖娼」と呼ばれる女性たちを引き合いに出そうと思う。古代オリエントやギリシャ・ローマの神殿を中心に広がった風習で、未婚の女性やミコさんたちが、時には有償で、時には無償で、男たちと「自由に」交わったのである。

近世の日本や中国にもミコさん娼婦のいたことが知られているが、これも「聖娼」の部類に入れて考えることができよう。

こういう女性たちに共通して見られる特徴は、「神の花嫁」として、男たちを無差別に愛する役割であって、その意味では、彼女らは、人間愛の原点にあったとさえ言えるのである。

その多くは報酬を取ったと言われているが、手に入れた金銭や物品は神に捧げるのが慣例であった。彼女ら自身は無私無欲であって、あるのは神への信仰心と、神を通して人間に向けられた普遍的な愛であった。

すでに述べたように、人間どうしの接触には、精神的なものや身体的なものがある。それらの仲立ちをするものは、愛か欲望である。通常、娼婦と客の間には金銭で処理される欲望の交換があるだけで、心の接触が欠けている。

しかし、心の接触が無ければ、身体的な接触が愛にまで高まることは無いであろう。心を開くことが先立つか、あるいは少なくとも同時でなければ、身体的な接触、つまり腕を開くことが人間愛に結びつくことは無いと言える。

聖娼たちは、神を接点にして、神を信じる者どうしの精神的な結びつきを出発点にして、身体的な結びつきへと進んだ。こうして心を開き合った人間にとっては、性的行為も単なる抱擁もさして違いのないところまで純化されていると言えよう。

しかし、神という絶対的な接点、絶対的な場が失われた今日、フリーハグを求める女性がいくら心を開いても、相手にそれを感じる心が無ければ、抱擁は空しいものに終わるであろう。それでもかまわないと言うならば、彼女はキリストか聖女の域に達しているということになる。

そこまで無償の愛に徹することができるならば、お食事さんと抱き合うことだって、伝染病の患者とキスすることだって平気なはずだ。心を開く相手を選び好みしていたら、逆に差別になるからである。

私は、フランスでの生活で経験したビズー（抱擁）の習慣はなかなか良いものだと思う。とにかく、人間のつながりを強めるものであることには間違いないからである。そのことについては、拙著『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて—』（ビワコ・エディション版）でも詳しく述べた。

ただし、それは心の接触から入って、身体のそれに至るといふ、通常の順序に従ったときに限られる。

お互いに親しくなり、好意を持ち合った人間どうしが、言葉や心の交わりから一歩進んで感情を表現し合うためのボディランゲージとして、ビズーはたいへん良い習慣だと思うのである。

全人類が無差別にフリーハグできるようになるのは一つの理想であるが、私たちにいま出来ることは、一足飛びに舞い上がるのではなく、まずは身近な人間との心の触れ合いから出発して、ビズーし合える人々の輪を少しずつ広げていくことではないだろうか。

[2008/03/07 magmag]